

# 古代

4世紀ごろには大和地方（奈良県）を中心としたヤマト政権が形成され、5世紀後半から6世紀にかけて、大陸より渡来人が海を渡り、多様な技術・文化を日本に伝えました。677年には大津（大津宮）に、742年には信楽（紫香楽宮）に遷都され、近江に都が置かれた時期もありました。710年に奈良（平城京）へ、794年に京都（平安京）に遷都し、以後は京都が日本の政治・経済の中心地となりました。近江は都と近く、早い時期から開発が進められ、園城寺（三井寺）や延暦寺など大規模な寺院が造営され、都と並んで仏教文化の中心地ともなりました。

森林・林業の面では、近江は奈良・京都へ向けて琵琶湖～瀬田川の水運を活用できたため、都・社寺の造営のための最大の木材供給基地となりました。平城京や社寺の造営に用いる木材を供給するために、田上、甲賀、高島には杣（木材を伐り出す森林）とその拠点である山作所が置かれました。当時は、日本で最大・最先端の林業地であったといえます。しかし、大規模建築に必要な大径木は成長に長期間を必要とします。良質な建築用材を切り尽くすと杣はより奥地へ移転し、跡地や農地などに開発されるか、放棄されていったものと考えられます。

## 滋賀の森林・林業に関するできごと

700 このころ、山作所・杣から木材を伐り出し都や寺院の造営に利用される

750 このころ、県内で製鉄が盛んに行われる

## 日本・滋賀のできごと

645 大化改新  
667 大津宮へ遷都  
710 平城京へ遷都  
742 紫香楽宮の造営開始  
747 石山寺創建  
752 東大寺大仏の開眼供養  
788 比叡山延暦寺 創建  
794 平安京へ遷都  
1086 院政の開始  
1167 平清盛が太政大臣に就任  
1185 壇ノ浦の戦い、平氏滅亡

# 1. 杣山と山作所

## 木材の供給基地「山作所」

山作所とは、8世紀（奈良時代）ごろ、造東大寺司（東大寺造営のために設けられた当時の官職名）の下で、木材の伐採・加工・運送を行なった臨時的機関のことを指します。また、木材を伐り出す山のことを「杣」または「杣山」といいました。

宮殿や寺院などの造営・維持のためには、大量の木材が必要でした。当初は都の近辺の山林から木材を調達したものの、十分な量・質の木材が枯渇して調達先が周辺部に広がっていったものと考えられます。



▲滋賀県内の山作所および木材運搬ルート〔朽木村史編さん委員会(2010)「朽木村史 資料編」、高島町史編さん委員会(2003)「高島町史」、甲賀市史編さん委員会(2007)「甲賀市史」を元に作図〕

都が置かれた奈良・京都に近く、琵琶湖・淀川水系の水運を利用できた当時の近江（滋賀県）では、古くから、木材を確保するために、多くの山作所、杣山が設けられました。甲賀、田上、高島などに山作所が設けられていたことが知られています。

## 田上・大石の山作所

田上や大石の山作所から木材が伐り出されたのは、藤原京（694年～710年）の造営の頃にさかのぼるといわれています。「万葉集」には、「淡海の衣手の田上山」との記述がみられます。田上、大石で伐採された木材は、瀬田川を筏で流して木津（京都府木津川市）まで送り、陸揚げされ、陸路で奈良盆地を南下して運んだものと考えられています。また、「正倉院文書」によると、とくに東大寺の造営のために多量の木材が伐り出されました。東大寺の造営が一段落すると、次いで石山寺（大津市）の大規模増築がなされました。東大寺の建設を司った役所「造東大寺司」の管轄下に「造石山寺司」が置かれ、石山寺造営を行いました。石山寺造営のための木材も、田上、大石から伐り出されたものと考えられています。

## 甲賀の山作所

古代の甲賀郡内には、東大寺の「甲賀杣」「信楽杣」のほか、西大寺の「甲可郡杣」「甲可郡縁道杣」などがあり、杣が集中する場所でした。新名神高速道路甲南インターチェンジの工事現場で、加工痕のある巨大な木材が多数発見されました。年輪年代の測定により、630年から680年頃に伐採された材と分かりました。

それだけ豊富な森林資源に恵まれていた地域であったことがうかがえます。

甲賀地域の柚を束ねた甲賀山作所からは、東大寺講堂を造営するための木材が供給されたようです。また、甲賀山作所に関する記録の多くは、761年～762年になされた石山寺の増改築に伴うもので、木材の買入れや輸送経費などの収支決算等が伝わっています。

山作所で伐採された材は、伐採・加工場所から人夫や荷車で運び出され、杣川・野洲川沿いの「川津」で筏に組まれ、野洲川から琵琶湖を経由して石山まで運ばれました。

### 高島の山作所

現在の高島市内には、多くの杣山が設けられ、木材の一大生産地となっていたものと考えられます。「子田上柚」は、現在の今津町、新旭町、安曇川町、朽木周辺にまたがるエリア、「朽木杣」は現在の朽木を中心とするエリアにあったと考えられています。子田上柚は、851年（嘉祥4年）に立券（律令制下で、物件の取得・売買・譲渡に際して公文書（立券文）を作成する手続き）されて藤原家の荘園となり、後に平等院（宇治市）に寄進され、摂関家のために木材を供給するようになり、税の免除などの特権を得ていました。

今津町酒波の日置神社に、子田上柚と朽木杣の関係について記した文書が伝わっています。平等院からの訴訟の一部で、朽木杣が不当な伐採を行っているとして子田上柚が訴え出ていることが記されています。このような、杣山をめぐる争いは少なくなかったと考えられます。

### 木材の集積地「津」

杣山で伐り出された木材は、筏を組んで川を下り、「津」と呼ばれる集積地に集められ、琵琶湖・瀬田川・宇治川を流して運ばれました。

東大寺正倉院に伝わる文書には、高嶋山作所に「小川津」という津があったことが記されており、「小川津」は木材の集積地・積み出し港であったと考えられています。この文書には、楡樽（スギの板材）の漕運にかかる費用として、小川津から宇治津（京都府宇治市）まで漕運するための功銭（雇夫に報酬として支払われた銭貨）は三貫文、宇治津から泉津（木津：京都府木津川市）までは一貫八〇〇文と記されています。

現在、高島市には「小川」とつく地名が2箇所あります。安曇川上流の山間部（支流・針畑川沿い）に位置する「朽木小川」と、鴨川下流の「安曇川町小川」です。小川津の所在については、「朽木小川」とする説と、「安曇川町小川」とする説があります。

高島山作所の杣山で伐り出された木材は、筏に組んで安曇川や鴨川を流し、琵琶湖上を勢多津（大津市瀬田）まで漕運され、更に瀬田川を流して泉津（木津）で陸揚げされ、陸路平城京方面へ運ばれたものと考えられています。

### 参考文献

- 大津市役所(1978). 新修 大津市史 第1巻 古代.
- 甲賀市史編さん委員会(2007). 甲賀市史 第1巻 古代の甲賀.
- 高島町史編さん委員会(2003). 図説 高島町の歴史.
- 朽木村史編さん委員会(2010). 朽木村史 通史編.
- 朽木村史編さん委員会(2010). 朽木村史 資料編.
- 滋賀県立近代美術館(2012). 石山寺縁起絵巻の全貌  
- 重要文化財七巻一挙大公開 -.

## 2. 製鉄遺跡と木材利用

古代の近江国では、製鉄業が盛んであったようです。県内各地で製鉄遺跡が確認されています。県北部では伊吹山麓（米原市伊吹町）、高時川流域（長浜市木之本町）、野坂山地周辺（高島市マキノ町）、饗庭野台地周辺（高島市今津町、新旭町）などで、湖西では比良山東麓（大津市・旧志賀町）、瀬田川左岸・大戸川周辺（大津市、草津市）などに多く見られます。

### 比良山麓の製鉄遺跡

多数の製鉄遺跡が見つかった比良山東麓（大津市・旧志賀町）では、遺跡の年代を特定するために木炭を試料に放射性炭素年代測定法により年代測定調査が実施されました。その結果、紀元前190年～紀元750年まで幅広い年代のものがみられました。分析数値の誤差がどの程度かの検討が必要ですが、弥生時代から奈良時代にかけての長期間にわたってこの地域で製鉄がなされていた可能性があると考えられます。

比良山東麓の製鉄遺跡は、その多くが谷筋の河川の岸に近接して営まれていました。製鉄所跡には、鉄の精錬時に排出される「金糞」（鉄滓）が多量に堆積していました。その分布状況から、一つの谷には一つの製鉄所が築造されたようです。製鉄に必要な木炭は、おそらく、その谷の上流にある森林から切り出されたものでしょう。森林伐採が環境に与えた影響は大きいと思われます。また、比較的まとまった地域で年代の異なる複数の製鉄遺跡が見つかることから、鉄や燃料の木材を確保するために移動をしつつ操業をしていたことが推察されます。

国道161号志賀バイパスの建設に伴い発掘された、大津市の「後山・畦倉遺跡」では、扇状地の最頂部に立地した製鉄遺跡が見つっています。この遺跡は奈良時代後半に創業された製鉄所跡で、遺跡からはイチイガシの木炭のかけらが多く出土しました。カシ類の木炭は強い火力が得られるため、製鉄に適したものと考えられます。当時、イチイガシの照葉樹林が周辺に広がり、製鉄に用いられていたと考えられます。

### 草津の製鉄遺跡

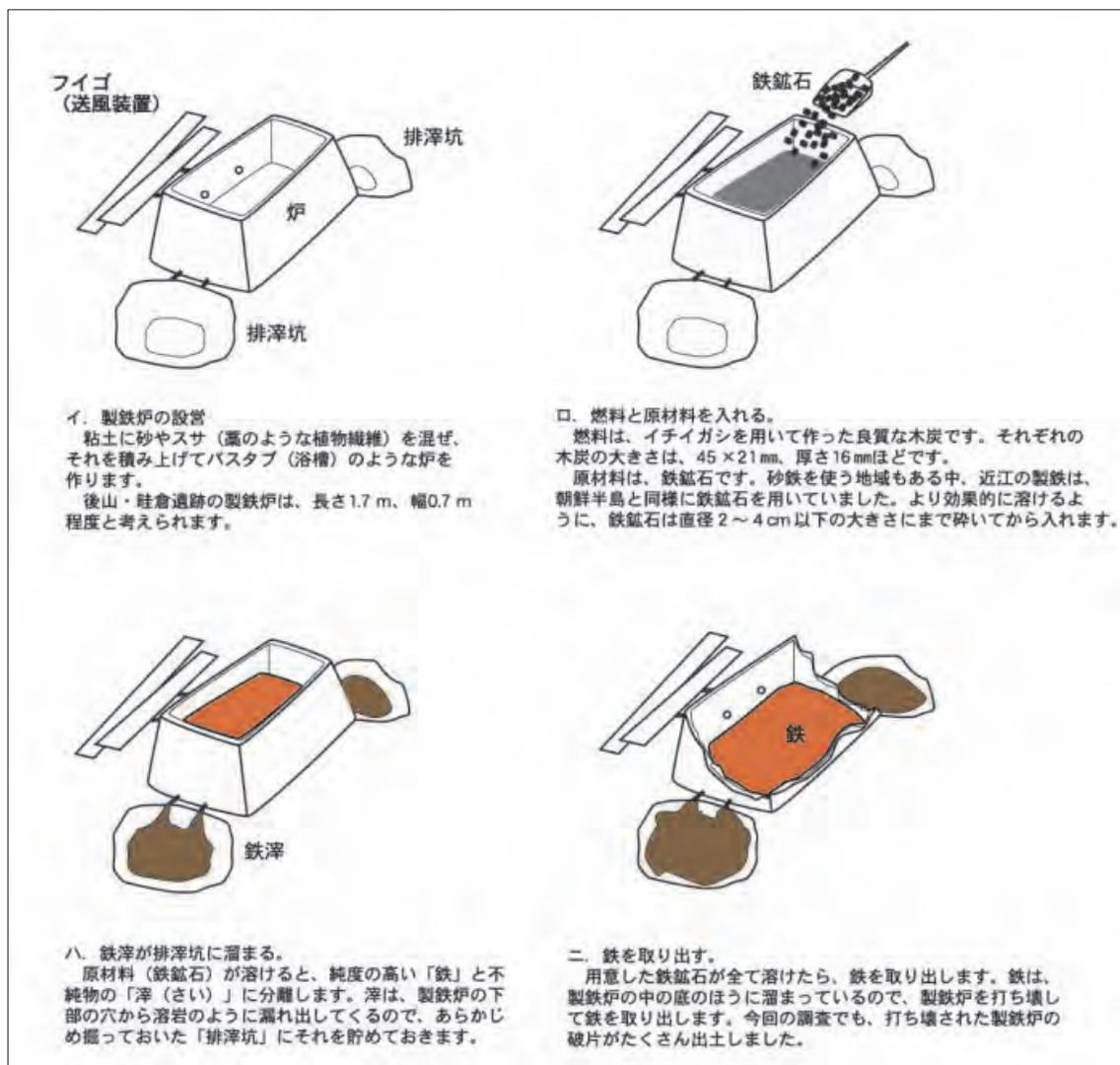
草津市野路町の「野路小野山製鉄遺跡」は大規模な製鉄所跡であると考えられています。京滋バイパスの建設に伴い実施された発掘調査（1979～1983年）では、製鉄炉10基、木炭窯6基、鍛冶炉1基、管理用建物1棟、工房跡11棟など、奈良時代の製鉄に関わる一連の遺構がそろって発見されました。その後の調査では、4基の製鉄炉が発見されています。7世紀後半に少しずつ操業が始まり、8世紀中頃には盛んになり、鉄の大量生産がなされていたと考えられています。近江国府の造営をはじめ、平城京の建設、紫香楽宮の造営など大規模な公共工事のために鉄の需要が大きかったものと考えられます。

### 参考文献

- 滋賀県埋蔵文化財センター(2014). 埋もれた文化財の話 34 びわ湖の船と人々の暮らし.  
 大津市歴史博物館市史編さん室(1999). 図説 大津市史 上巻.  
 志賀町史編集委員会(1996). 志賀町史 第一巻.

財団法人滋賀県文化財保護協会(2007). 滋賀文化財  
だより No306. 古代の製鉄遺跡－大津市後山・畦  
倉遺跡の調査結果－.

公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2016). 新近江  
名所圖絵 第 215 回 古代近江の製鉄所－野路小  
野山製鉄遺跡.



▲製鉄の方法 [財団法人滋賀県文化財保護協会(2007)「滋賀文化財だより No306. 古代の製鉄遺跡－大津市後山・畦倉遺跡の調査結果－」より転載]

